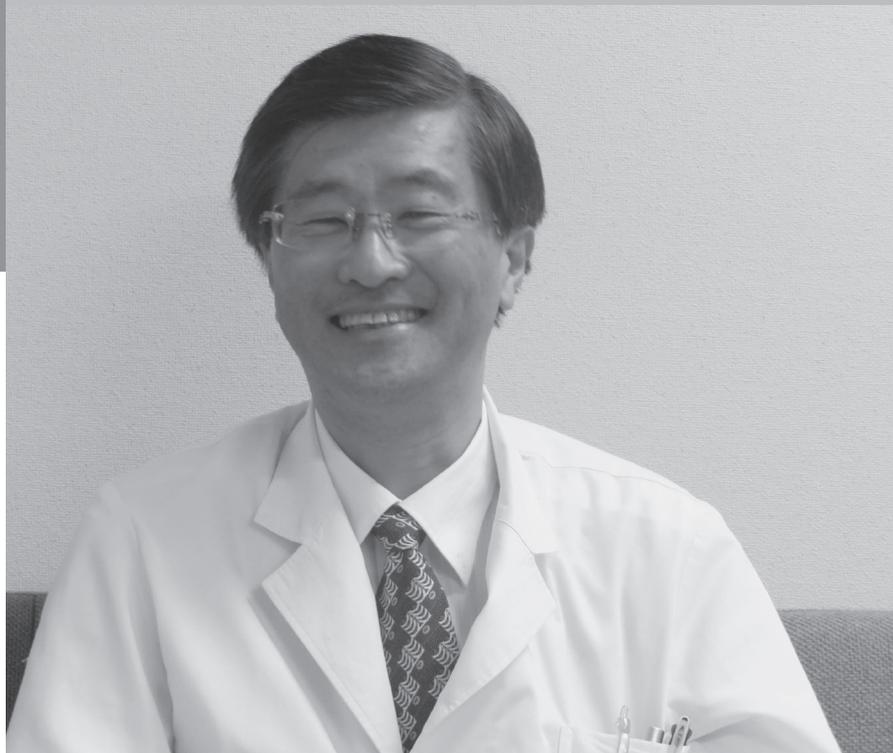


INTERVIEW

揖斐川町春日診療所 所長
岡 裕也先生



専門キャリアを捨て、 人をまるごと診る医療を志して

聞き手：山田隆司 地域医療研究所長

細分化された専門医療に疑問

山田隆司(聞き手) 今日とは岐阜県の揖斐川町春日診療所に岡 裕也先生を訪問させていただきました。

ここに赴任されて何年目になりましたか？

岡 裕也 丸4年です。この春から5年目です。

山田 もう4年になりましたか。先生は、協会の再研修プログラムを受けた後ここに赴任していただいたという経緯がありますが、それ以前の先生の経歴から現状に至るまでを少し紹介していただければと思います。

岡 私は愛媛大学を昭和61年に卒業しました。当時は医局に入局するというのが一般的な時代でしたが、私はいきなり専門に進むことに疑問があり、今でいう初期研修をしたいと考えたのですね。それで奈良県の天理よろづ相談所病院の

総合診療科で2年間、ジュニアレジデントとして全人医療を学びました。

山田 その研修は内科中心だったのですか？それともローテーションしたのですか。

岡 ローテーションではなく、主に内科中心ですが、レジデント医が担当する総合病棟というものが、そこを受け持ちました。各科の専門の先生がサポートをするという形で、良いシステムだったと思います。

山田 かなり先駆的だったのですね。

岡 はい。そこで2年間勉強していた時に京都大学泌尿器科教授の吉田 修先生に出会い、3年目から京都大学の泌尿器科に入局しました。京大病院やその関連病院の京都市立病院で4年間働

いてから、京都大学大学院へ進みました。

山田 大学院ではどんな研究をされたのですか。

岡 大学院では腎細胞がんの分子標的治療薬の基礎となるMAPキナーゼの研究をしました。幸い成果を上げることができ大学院へは4年行って卒業し、その後京都大学医学部附属病院を経て、もう一度天理よろづ相談所病院の泌尿器科に戻りました。それから神戸中央市民病院(現 神戸市立医療センター中央市民病院)、奈良社会保険病院、京都桂病院などで勤務し、臨床でもがん治療を専門としてきました。手術も多数手がけ、腎臓がんや前立腺がんなどを中心に5,000例以上の手術を経験しました。

最後の10年間程は泌尿器科部長を務め、当時、奈良県下で唯一の腹腔鏡技術認定医も取得しました。今は外科も腹腔鏡手術の時代ですが、その頃泌尿器科も腹腔鏡の手術の時代になって腹腔鏡の技術認定医制度が始まったところだったのです。

一方で、毎日外来患者さんを50~100人診て手術をするという、流れ作業的な医療に疑問を持つようになりました。最初に天理よろづ相談所病院で人をまるごと診る全人医療を学んだこと

もあり、そういった細分化された専門医療が本当によいのか?と考えるようになったのです。それが50歳を過ぎたころですね。

もう一つは、専門医というのはがんを治してなんぼなのですね。治らなかったら敗北で、結構敗北も多いのです。劇的によくなって喜んでもらえるという経験もちろんありますが、手術をして治らなかった患者さんは大病院では最期まで看ることはできないので、他院やホスピスなどへ送るしかない。そういう無力感もありました。

また、自分としては以前から外科医としてのピークは50歳過ぎくらいだと考えていました。高齢になっても手術を続けている方も大勢いらっしゃいますが、体力がなくなったり目が悪くなったら自分の納得のできる手術はできなくなる。ある程度年齢がいったら手術は後進に道を譲るのが理想ではないかと思っていました。

それで50歳を機にいろいろ考えて、総合診療ということが頭にあったので、揖斐郡北西部地域医療センター(久瀬診療所)へ見学に行くことにしました。

地域医療振興協会の再研修を受けて

山田 どうして久瀬診療所を知ったのですか。

岡 インターネットで地域医療、へき地医療、総合診療というキーワードを調べていたら、地域医療振興協会に遭遇したのだと思います。それで夏休みに久瀬診療所の吉村 学先生を訪ねたのです。その途中、山が綺麗で、自分の出身の徳島と景色が似ていてよいところだなあと思いました。2日くらい見学して、その時はそれで帰ってきたのですが。

山田 吉村先生が実践されていた医療は、先生が思っていたようなものだったのですか。

岡 その時は何も分からなかったので「ああ、こういうものかな」と。でも、50歳を過ぎた医者がよそから見学にきてびっくりしたと思うのですが、看護師さんたちも暖かく迎えてくれて、好印象がありました。

それで53歳のときに教授に申し出て、最初は教授や先輩や同僚にももったいないと反対され